

Clinicopathological and histopathological review of dedifferentiated liposarcoma: a comprehensive study of 123 primary tumours

毛利, 太郎

<https://hdl.handle.net/2324/6787449>

出版情報 : Kyushu University, 2022, 博士 (医学), 課程博士

バージョン :

権利関係 : Public access to the fulltext file is restricted for unavoidable reason (2)

(別紙様式2)

氏名	毛利 太郎
論文名	Clinicopathological and histopathological review of dedifferentiated liposarcoma: a comprehensive study of 123 primary tumours
論文調査委員	主査 九州大学 教授 馬場 英司 副査 九州大学 教授 中川 尚志 副査 九州大学 教授 石神 康生

論文審査の結果の要旨

脱分化型脂肪肉腫は、後腹膜や四肢に好発する悪性軟部腫瘍であり、多様な組織形態を呈する。しかし、個々の組織形態と予後との相関は十分に解明されていない。本研究では、九州大学形態機能病理学教室で診断された原発性の脱分化型脂肪肉腫123例（体腔内発生81例、末梢発生42例）の臨床情報収集および組織学的レビューを行い、多数の臨床病理学的因子と予後との関係を調査した。臨床的には、全体、体腔内発生、末梢発生のいずれの群においても、遠隔転移症例で有意に全生存期間の短縮を認めた（単変量解析にてそれぞれ、 $P < 0.0001$, $P = 0.0011$, $P = 0.0101$ ）ものの、再発症例では全生存期間の短縮を認めなかった。組織学的には、体腔内発生群で核分裂像が ≥ 10 個/HPFの症例および円形腫瘍細胞を有する症例で有意に全生存期間が短縮していた（多変量解析にてそれぞれ、 $P = 0.0022$, HR 4.39, 95% CI 1.71-11.28; $P = 0.0014$, HR 7.19, 95% CI 2.14-24.16）。また、末梢発生群では、壊死および高異型度成分を有する症例で有意に全生存期間の短縮を認めた（単変量解析にてそれぞれ、 $P = 0.0068$, $P = 0.0174$ ）。以上の結論として、体腔内発生の脱分化型脂肪肉腫では、円形腫瘍細胞の有無が重要な予後因子となる可能性を示唆している。また、遠隔転移は予後に悪影響を与えるものの、再発は予後との相関が明らかでないことが示唆された。

以上の成績はこの方面の研究の発展に重要な知見を加えた意義あるものと考えられる。本論文についての試験はまず論文の研究目的、方法、実験成績などについて説明を求め、各調査委員より専門的な観点から論文内容及びこれに関連した事項について種々質問を行ったが適切な回答を得た。

よって調査委員合議の結果、試験は合格と決定し、博士（医学）の学位に値すると認める。